さよならを知らない世界

香喃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さよならを知らない世界

【Ｎコード】
Ｎ１０７７Ｚ

【作者名】
香喃

【あらすじ】
「ただいま」

今もまだその言葉を待ってる。
次目覚めたときもきっと、愛しき（かなしき）君に光あれとただ願うから。

説明

この小説は摩訶不思議ッ！？女子高生の魔法生活を読んでからみることをお勧めします。

この小説は、おもに題名から内容をつくっています。

全て短編小説です。

沙捲が死去する前のお話です。

ついでに言ってしまうと、スランプ回避用の小説なので更新はまちまちで、更新した日は「あ、スランプなんだ」と思ってください・・・・

たまに詩の様なものが入りますが下手くそなのは自分でも分かっていますので（笑）そういうのが嫌な方は回避してくださっても本編になんら影響はありません。

大切な失くしもの（前書き）

これは摩訶不思議女子高生の魔法生活の香喃と沙捲の思い出です。
先に本編を読んでから見る事をお勧めします。

大切な失くしもの

小さな小さな思い出を　両手いっぱいに拾い集めて　空も驚く色を
描くよ
こぼれた言葉、失くした思い、消えた意思さえかき集めるから

そして次目覚めた時もきっと
君に光あれとただ願うから

だって貴方が消えたあの日から、泪におぼれたあの日から、

「ただいま」

今もまだ、その言葉を待ってる

忘れがたきあなたの面影。

さよならなんて知らなくていい。
幻想色の時間の中であなたは生きてる
眠りつづけたあなたの想いが、私の中で芽吹き始めた。

夕陽の前でくるり舞う

夕陽の前でくるり舞う

「・・いつまでもなにしてんだよ？」
そう言われ香喃は慌てて振り向いた。
「あー・・えっと、ほら見てくださいって」
「？」
香喃が指さす方には丘の向こうへと沈む陽があった。
「魔界っていつも夜じゃないですか。だから逆に新鮮だなぁって」
「・・まあな。」
そう言った横顔が西日で真っ赤になって目がくらむ。
「え？」
思わず声が出た。
一瞬、沙捲が消えたように見えた。
きっと光のせいだと思うのだがとてつもなく不安になった。

「どうした」
「いえ、なんでも・・」
沙捲は夕日から眼をうつした。声を聞いて香喃は少しほっとした思いだった。
黒いコンタクトレンズに夕日が反射して赤く染まる。
香喃は不安に対するごまかしも込めて、コンタクトをはずした方が綺麗だと言う。
でもこれは本心だ。
一瞬驚いたように瞬きし、沙捲はばーか、と苦笑交じりに言った。
そして子供の頭を撫ぜるように香喃の髪をなでる。
「・・・よってくか？」

「どこにです・・？」
「丘だよ。」
既に陽は沈み、赤紫色の雲が名残惜しそうに浮かんでいるだけだ。
「でももう沈みましたよ？」
「丘に隠れただけだろ。まだ見えるぞ」
そういってさっさと行ってしまった沙捲を追いかけるようにして香喃はついて行った。

丘を登ると沙捲の言った通りまだ陽は落ち切っていなかった。
既に座っていた沙捲に習いスカートを整え横に座ると地面にこもった太陽の暖かさが感じられる。
「・・・明日は晴れですねぇ。洗濯物がよく乾くといいですけど・・・」
香喃の呟きに沙捲が吹き出す。
「お前そんなこと考えるのか？」
「え、だって夕焼けの次の日は良くはれるって・・」
「まあ言うけどな・・夕日見て洗濯物考えるってのもかなりの曲者だな」
不満そうに頬を膨らませる香喃を沙捲は余計に笑う。
「ま、ちゃんと干した方が気持ちいいしな」
「沙捲さんもたまにはやってくださいよ」
「おれはちゃんと洗濯機のスイッチを入れられるぞ」
「・・それは常識の範囲内です」
自慢げに言ったその一言に香喃はがっくりとうなだれる。
この男は今の今まで洗濯機の使い方が分かっていなかったのだ。
最初にやらせたときは粉洗剤と間違えて入浴剤を入れてワイシャツをまっピンクにし、また次の時は柔軟剤の代わりに色が似ているからと言って牛乳を入れた。
やっとこの頃洗濯機をしっかりと使えるようになったのだ。常識のように思えるがこの男にとっては大きな一歩だ。

はぁ、と小さくため息をつき香喃はそれ以上突っ込みを入れなかった。

「魔界にも夕焼けはあるんですか？たまーに太陽みたいなのが昇るじゃないですか」
「太陽じゃねぇよ。第二の月だ。」
「・・・？」
香喃が首をかしげると沙捲が説明してくれた。
「いつも昇ってんのが第一の月。たまに魔界の時空の周期とぴったり重なって出るのが第二の月だ。」
「へぇー・・」
香喃が感心すると沙捲はさらに続ける。
「第一の月は夕焼けにはならんが第二の月は青い夕焼けになる」
「いつ見れます？」
「周期はだいたい１２０年に一度だ。あと１００年くらいでなるからその時は連れてってやる」
「ホントですか！？」
香喃が喜ぶと沙捲は頬を緩めた。

「第二の月にはいろんな言い伝えが合ってなぁ・・」
今日の沙捲は饒舌だ。
たくさんの伝説を話してくれた。

そして決まって、いつか見せてやる、という。
香喃はそれに応じて楽しみにしてますね、と言葉を返した。

すっかり陽も沈み、ひんやりとした夜の空気が漂う。

「帰るか」
沙捲が差し出した手につかまり香喃は立ち上がった。
「そうしましょうか」
夜の帳の降りた帰路を二人はゆっくりと歩いて行く。
時折香喃が洗濯の衣服の色分けついて熱心に話す声と、沙捲がどれも同じだと一蹴する声が聞こえた。
「色分けは私がしますけど、干すの手伝ってくださいね」
「ああ・・・」
「明日、晴れるといいですね」
「そうだな」

終

夕陽の前でくるり舞う（後書き）

なんか初めてこういうの書きましたw
気恥ずかしw

なんか恋人みたいな雰囲気ですけど、二人とも師匠と弟子の関係です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1077z/

さよならを知らない世界

2011年12月4日01時47分発行